

作家・作品解説

【少年～青年時代】

藤原は、1975年京都市に生まれた。父は、現在も精力的に作品発表をしている陶壁作家の藤原郁三で、76年に益子町に転居した。幼少時から絵が好きだった藤原は、やがて高校生となり美術大学への進学を決める。その際に藤原は、大好きで得意と感じていた絵画ではなく、身近であった工芸でもなく、彫刻科を受験する。当時の藤原は、自分が好きな作品を改めて見直した際に、彫刻家が描く絵画やドローイングに強く惹かれていたことに気づき、彫刻科を選んだという。浪人時代に「すいどーばた美術学校」で学んだ際には、「新制作協会」に所属する具象彫刻を手掛ける作家たちや20世紀のモダニズム彫刻に影響を受けた。

【東京藝術大学～若手アーティスト】

東京藝術大学彫刻科では、技術習得を主眼とした授業を経て、段々と自由度の高い課題が課されるようになる。藤原は普遍性の高いテーマである人物像を自分の制作のテーマに定めた。その頃から用いられるようになっていたのが、「集積」という方法である。例えば、《Accumulating evil:積幣》【図1】は、故郷の益子町でみた器の重なりが人間の姿に見えたことなどから着想され、器や壺が重なりあった形状をしている。このようなタイプの作品と並行して、藤原は具象的な人間像も並行して制作していく。特に知られているのが、2005年頃から制作された虚ろなまなざしをした一連の人物像である。【図2】これらの作品群では、現代社会を生きる人間の虚ろな外観、そして、焼成のための空気穴である目や口の穴などから覗ける「空の内部」が調和している。彫刻の内部への問題意識は、量感を重視し、その充足を目指した近代彫刻の乗り越えを図る多くの現代アーティストが取り組んできた課題【注1】だが、藤原は、それを作品のイメージとまく合致させることに成功した。今回、出品されている《立像／2014B 01-03》等では、洋服などの表現が取り除かれ、よりシンプルな立像となっている。これらの作品群でも、当然、空気穴で内と外がつながっており、それが人間の原型とも呼べそうな形に軽やかな神秘性を与えている。

【近作《像化/台化-軸と周囲》】

2021年から制作されている《像化/台化-軸と周囲-》シリーズは、轆轤でまわる粘土から着想を得たボーリングのピン型の人物像に抽象的な形のパーツが組み合わさっている。上半分が《像化》で、下半分が台座を兼ねる《台化》で、それぞれ1つだけでも作品となる。藤原は、このシリーズに自分の人物像を探し求めていく過程を経てたどり着いた。当時、藤原は、自分にしかできない表現を探すべく、ドローイングを繰り返していたという。その中で、藤原は、3つの小さな点や、抽象的な○△□の組み合わせが、顔のイメージとなる事を改めて認識した。これを出発点に、ある方向から見ればドローイングA、別の方向から見ればドローイングBといったように複合的な視点を意識して本シリーズが構想された。この展開は、パーツの集合体として作品を制作する方法が、作品構想の方法として、発展したものと考えられる。このように自作を包括的に俯瞰し、組み合わせで生まれる作品群は、今回の展示の様に一堂に会した際に、類似点や相違点が自然と浮かび上がり飽きのこない展示効果を発揮することとなる。

【新作】《像化-Planets on The Planet-01》

新作《像化-Planets on The Planet-01》では、パーツやイメージの組み合わせが、さらに多彩となっている。加えて、《台化》で見られた作品を支える柱や梁のような構造がよりはっきりと用いられ、《像化/台化》シリーズ等のこれまでの作品を束ねる地母神のような印象を与える。また、空気穴の形状も、より明確に窓のような形をなし、建築物のような造形上のアクセントとしても機能する。これまでの制作を十全に活かしながら、躯体や構造と呼べる要素を積極的に自作のイメージに取り込み統合した作品と考えられよう。ここで、藤原が日々の制作で何を感じているかを彼の言葉から引用したい。「土と水の調和からなる粘土は、その水分と円滑に離別させて、火(燃焼)のエネルギーによって石化する。そして、それは恒久的な物質でもあるが、やがて土を作る助力となる」。この言葉には、藤原が格闘するかのように土をこね、ヒビや割れを心配しつつ作品の焼成を行いながら、それがやがて土へと還ることを意識している分重みがある。いわば、藤原は万物の流転あるいは量子論的な世界観を、土や火との対峙から紡いでいるのだ。

最後に、藤原の作品を、便宜的な現代アートの評価軸に照らしてみよう【注2】。①視覚的インパクト(複合的な視点による人物の異形さ)、②技法素材の探求(陶彫刻のバランスや細部)、③美術史への問題意識(空洞を軸とした彫刻論)、④社会的メッセージないし自然世界への眼差し(実体験から導かれた土という素材の循環)、⑤聖性・詩性あるいは狂気(異形さと緻密な作りこみ)、いずれも非常に高いレベルで備えている。これらは、作品の周りを惑星になった気分で、1点1点、あるいは呼応するかのような作品同士を見比べて巡っていくことで、作品と鑑賞者の間に必然の輝きを放って立ち現れるだろう。

(宇都宮美術館 主任学芸員 小堀修司)

【注】

※1 彫刻内部への意識が顕著な同時代の作家としては、それを「彫刻の恥」と呼んだ袴田京太郎が挙げられる。袴田の問題意識、及びそれに対する考察については、次の文献を参照されたい。

谷新「1970年代と〈その後〉……ふつうにしてラディカル 地に足をつけた作家たちの「本質」への下降」『ミニマルIポストミニマル1970年代以降の絵画と彫刻』展図録所収 宇都宮美術館 2013年

※2 挙げた評価軸は、便宜的に著者が用いているもの。しかしながら、ごく近い視点として、小崎哲哉氏は「インパクト」「コンセプト」「レイヤー」を評価軸とした上で、「現代アートの動機」として7つの近い要素を挙げている。詳細は次に示す文献および松岡正剛氏の同書のレビューを参照されたい。

小崎哲哉 「現代アートとは、何か」河出書房新社 2018年 松岡正剛 「松岡正剛の千夜千冊 1785夜」 <https://1000ya.isis.ne.jp/1785.html> 2023年3月15日閲覧

本稿は、下記の文献と藤原彩人氏へのインタビューを参考として執筆した。

【書籍】 藤井匡 「ミニマリズム後の人間彫刻」 阿部出版 2021年 AGAIN-ST「AGAIN-ST BOOK」 AGAIN-ST2017年

【展覧会図録】 「Shizubi Project4 ヒトのカタチ、彫刻 津田亜紀子/藤原彩人/青木千絵」 静岡市美術館 2014年 「Articulation 区切りと生成」 小山市立車屋美術館 2022年

「AGAIN-ST 10th Exhibition AGAIN-ST ルーツ/ツール 彫刻の虚材と教材」 武蔵野美術大学 美術館・図書館 2022年



【図1】
《Accumulating evil:積幣》
1999年
テラコッタに着色
300×80×80cm



【図2】
左:《The sun shadow:太陽の影》
右:《The moon light:月の光》
2006年
施釉陶
各76×45×65cm